
僕と彼女の同性生活

近江 駈琉

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

僕と彼女の同性生活

【Nコード】

N2807R

【作者名】

近江駆琉

【あらすじ】

高校3年生の1月。受験戦争真ただ中の私『優紀』は思いもよらない人生の岐路に立った。平凡に毎日を過ごしてきた私に起こった大事件。でも、これもきつと私という人生においては当然で当たり前のはず。さあ、一步踏み出そう。平凡な私の日常へ　＊シリアス<コメディの軽いタッチです。

プロローグ（前書き）

ご注意

この小説は『両性具有』について主題ではございませんが扱っております。難しい分野ですので、あくまでフィクションである事を最初に示させていただきます。全ての事象において、非科学的・非医学的な見地です。

それらについて、何らかの意見を投ずるもの、批判や中傷、軽視するような気持ち、意味は一切ありません。

また、何度も言いますがフィクションですので、非現実的な都合のよい設定、展開があります。ご了承ください。

以上の内容を踏まえ、この小説の扱う内容について批判・中傷はない、という方のみ、本編へご進みください。

お願いいたします。

ブログ

「いつてらっしゃい、優紀」

「いつてきまーす」

いつもと同じ時間に、いつもと同じセリフで、いつものように母親に見送られて私は家を出た。

桐谷優紀、キリヤユウキ 高校3年生。

彼氏いない歴〃年齢の、どこにでもいる女子高生だ。

まだまだ人生これからで、楽しいこと、悲しいこと、嬉しいこと、嫌なこと…

とにかく毎日が新しい事でいっぱい、そして、それが当然だった。

受験勉強に辟易して、死にたくなって。

月9のドラマみたいな恋に憧れて。

うるさい親にいらいらして。

友達とカラオケで盛り上がって。

そして、急にそんな自分が馬鹿らしくなる。

そして、自分という存在の小ささや、人の優しさを学んでいく。

誰もが通るこの道を、私はこの日も一歩前に進むはずで、まさか大きく別の道に踏み出すなんて、思ってもみなかった。

受験生の日常

ふわふわの栗色の髪が3つ前の席で前後に揺れている。今日は火曜日だから、きつと昨夜は遅くまでお気に入りのテレビを見ていたのだろう。あてられないといいけれど。

そう思いながら彼女と同じ色に染めた髪に指を絡ませた。彼女の髪の色は自毛、私の髪は生まれつきの猫っ毛。少しずつ相手に合わせて、「二卵生双生児みたいにしよう」と彼女が提案して染めたのだ。双子は冗談だろうけど、兄弟のいない私にとって、その提案はごくうれしいものだった。

（あ、寝た。って、先生見てるし）

ぐらぐらしていた頭がすとん、と落ちたまま上がってこなくなった。それと同時に先生が彼女を視界にとらえた、が、そのまま話を続けた。まあ、年明けの3年生の授業はみんなが受験で必死だから、寝ている生徒に構っている暇なんてないんだろう。

「美野里、さつき寝てたでしょ？先生絶対に気付いてたよ」

「うわあ、ばれた？あ、それ！！」

私の親友、オオカワミノリ大川美野里は授業の終わりを告げるチャイムではっと頭をあげた。眠たげに眼をこすっている彼女の机に近づいて声をかけ

ると、まずいなあ、という表情でおどけて見せる。しかし、それも一瞬で、私が持っているノートを見つけると「ありがとー！！優紀、大好きっ」と花が咲くように笑う。その笑顔はすごく可愛くて、思わず私まで微笑んでしまう。

いや、外見を言ってしまうえば、私も彼女もいわゆる十人並みだ。それでも、私は彼女の素直な所がすごく好きだった。

「それ、明日まで借りてていいかな？優紀のノート見やすいから、じっくり家で見たいんだ。明日朝一で返すから」

「どーぞ。汚さないでね？」

私は家で勉強するときにノートは見ないから全然構わない。それでもノートをとるのは、それが好きだから。丁寧に文字を書いて、カラーペンでポイントとかを工夫して書く。そうして出来上がった私のノートはあたかも雑誌のページ見たいになつて、なんだか満足するのだ。そして、彼女がそれを喜んでくれるから。

だから貸すのはいいのだけど、美野里はながら作業が大好きなのだ。勉強しながらの夜食は当たり前。流石に飲食物の汚れは気になる。

「大丈夫！！ちゃんと気をつけるから」

「お、ちょうどいいところに。それ、俺にも貸してくれよ」

「あっ！！ちょっと、東一！！」

美野里にノートを渡そうとした私の後ろから、ひょいっと手が伸びてきて、彼女に渡るはずだったノートは視界から消えてしまった。

165cmある私から、そんな事ができる男子なんて、一人しか思い当たらない。クラスメイトの香西東一だ。
カサイトウイチ

「こらあ！！優紀のノート、返しなさいよ！！私が借りるんだからっ」

「お前は家でうつすんだろ。だったら放課後までに返せばいいじゃん？いやー、今日俺遅刻しちゃってさ、今ガツコ来たんだよ。いいよな、優紀？」

153cmという小さめな美野里は180cmの東一を、きつと見上げて大きな声をだした。ここで無駄だとわかりながら手を伸ばさない彼女の頭の良さと、男に媚びない態度（意識しているのか知らないけれど）も、私が彼女を好きな理由の一つ。

東一はそんな美野里を簡単にあしらって、最後の一言で私に許可を取った。朝が弱いらしい彼は、こうしてよくノートを借りに来る。私としては別に構わないので頷くと、東一は「サンキュ、今度またお礼するから」と言いながら私の頭をぽん、となでて颯爽と席に戻って行った。

そう言えば、東一は律儀にもノートを貸す度に、チョコなどのちょっとしたお菓子をくれる。ただ、それらは甘いものが得意でない私

に代わって、美野里のお腹に収まるのだが。

「もー、ちゃんと放課後までに渡してくれるかなあ……」

「だめなら東一の家に取りに行けばいいじゃない」

美野里と東一はお隣さんで、家族同士で仲がいらしい。ちなみに、東一が美野里にこうして絡むのは、きっと彼女が好きだからに違いない。だって、東一が受ける大学は私と美野里が受ける大学と近いし。

二人が付き合って幸せになって欲しい、とは思っけれど、東一に美野里を取られてしまう気がするのも嘘じゃない。複雑だ。

始まりは唐突で

そんなほのぼのとした日常を過ごしていた私の身体に異変が起きたのは、今日の最後の授業中だった。お昼くらいからなんだか食欲がなくて、だるくなってきた、風邪っぽいかなとは思っていた。けれど、それはどんどん悪化して今は座っているのに視界がくらくらするし、おまけに吐き気までする。

保健室に行きたいけれど、声を出すことも辛くてとにかく目を閉じてやり過ごすしかない。

（気持ち悪い…どうしよう…）

運悪く私の席は教室の一番後ろ、しかも隣の席の子は今日は欠席している。誰にも助けを求められずに、私はこらえるしかなかった。

「先生、桐谷が具合悪そうなんで保健室に連れて行きます」

「え…、優紀！？大丈夫？」

「顔色が良くないな。大川、香西、ついて行ってやりなさい」

そんな私に、東一が気付いて席を立った。それにつられて美野里も来てくれる。助かった、と思い立ちあがろうとするが、うまく身体に力が入らない。

「立てないのか？美野里、優紀の荷物まとめて持ってこい」

「う、うん。おばさんにも連絡するね」

周囲の声がだんだん遠くから聞こえてきて、ふわりと身体が浮いた。東一に抱きかかえられたのだ。それを恥ずかしがる余裕もなく、私は苦しさにも耐えるのだった。

真実への道のり - 1

どう、こじ。

目を覚ました私の視界に飛び込んで来たのは、見たことのない場所だった。いや、正確に言えば知っているが見たことのない場所。

白い天井に白いカーテン。寝心地のよいとは言えないベッドと布団。独特の消毒液の匂い。そう、病院だ。私はどこかの病院の個室にいるらしい。

…というか、いつから私は眠ってしまったんだろう。

今日は火曜日で、学校に行って授業を受けていた。最後の授業で具合が悪くなって、東一が保健室まで運んでくれて…？

いや、教室を出たあたりから記憶がない。私は眠っていたのではない、具合が悪くて気を失ったのだ。東一や美野里に迷惑をかけてしまった。

「あら、起きたのね。体調はどう？」

静かにドアが開き看護婦さんが入ってくると、彼女は身体を起こしていた私を見て声をかけると、すぐに点滴や血圧をチェックし始めた。

「ちょっと気持ちが悪いけど、大したことありません」

「よかった。もう少ししたら先生とご両親がいらっしゃるから、横になっててね」

時計を見ると、針は夜の9時を指していた。それなりに長い間、私は眠っていたようだ。そのためか、点滴のためか体調はだいぶ良くなっていて、いろいろなことが気になりだした。

「あの、私はいつ頃運ばれてきたんですか？」

「ああ、そうよね。あなたは学校で倒れて、すぐに救急車で運ばれてきたの」

看護婦さんの言葉に私は驚いた。まさか救急車を呼ばれるような状態だったとは思わなかったし、これが初めての救急車経験だったから。

「私、どこが悪いんですか!？」

「ごめんなさい、私は何も聞いていないの」

本当はそんなわけない。誤魔化すように苦笑いをして看護婦さんはすぐに病室を出て行ってしまった。

不安で胸が締めつけられるように痛い。どうしよう、ただの風邪や貧血だと思っていたのに…

揺れる瞳をごまかすように、私は横になり布団をかぶった。

真実への道のり - 2

「え…私が、男…？」

「いいえ、優紀さんは両性具有です。つまり、男でも女でもあるんです」

しばらくして両親と、白衣を着た優しそうな先生がやってきて私はドキドキしながら身を起こした。両親の表情は硬い。やっぱりここが悪いんだ。

そして、とうとう告げられたのは思ってもみない病名だった。

「答えにくいかもしれませんが、最近生理はありましたか？」

「い、いいえ…でも、もともと不順なので」

「では、生理痛は重い方ではありませんでしたか？」

「はい。日によっては学校に行けないこともありました」

先生はカルテではなく、しっかりと私と目を合わせて、気遣いながら質問をしてくれる。でも、信じられなかった。私には全然そう言った知識は無かったし、どうしてそんなことを聞くのかもわからなかった。

「…大変、申し上げにくいのですが。検査の結果、あなたは子どもを産むことができません」

「…………え…？」

「ごめんね、優紀っ…お母さんがもっと早く気付いてあげれば…」

衝撃だった。まだ、私は18歳の高校生なのに。呆然とする私を母が泣きながら抱きしめ、その母の肩に父が手を置いている。あまりに受験勉強一色だった私の生活とかけ離れた展開に、頭も心もついていけずにフリーズする。

それから、先生は丁寧にゆっくりと私の置かれた状況を説明してくれた。

医学的な詳しい説明は敢えてここではしないけれど、私の生理の悩みは両性具有が原因であり、もっと早くに受診すれば子供を産めなくなることはなかったらしい。

だから、母は泣いていたのだ。

内診とかになったら、と思うと恥ずかしくて、病院に行きたがらなかった私を無理にでも連れていけばよかったと。

「ここまでではわかりましたか？」

「…はい。大丈夫です」

「顔色がよくないですね。体調はどうですか？少し休みましょう」

「いえ、あの…大丈夫ですから続けてください。ちゃんと全部聞かないと、不安なんです」

相変わらず優しい先生が気を遣ってくれたのはわかったけど、私の頭の中にあっただのは、私が両性具有で子供が産めなくて、卵巣や子宮を摘出しなければならぬ事へのショックより、まだまだあるだろう聞いていない事への不安だった。

子供を産めないなんて、今の私にはなんの実感もなかったし、今の世の中子供を産む事だけが幸せじゃない。

頭のどこかで冷静な私がそう提案している。いつの間にか私は思春期を終えていたんだな、とまで考えていた。

「それもそうですね。実は、ここからが本題なんです。優紀さんは、女性として自分の子供を持つ事はできませんが、男性としては可能なんです」

「え…えっ？……ええええー！！」

あまりの驚きに開いた口が塞がらないし、夜9時の病院には決して相応しくない大声を私は出してしまった。

まさに『ポカーン』という効果音がぴったりだ。

「う、うつそお…それって、ほ、本当ですか！？先生っ！！」

「はい、本当です。優紀さんは適切な手術をすれば一般の男性として生きていく事ができます」

まさか、私が男の子として…その、そういう行為ができるだなんて思えなくて、私は先生を見た。

今さらだが、胸元のネームプレートには鈴木、と書かれているのに気づいた。

そして鈴木先生はなぜか安心したようににっこりと笑って、爆弾発言をしたのだ。

「もちろん、法律の上でも男性になります。これから優紀さんがしなければならぬ事は、自分の状況を落ち着いてしっかりと理解すること。そして、これからどちらの性別で暮らしていくか決めることです」

まさに、青天の霹靂とはこれをいうのだろう。辞書を引きながら受

験生の私がわからないような諺を誰がいつ使うんだ、と憎く思ったが、まんざら無駄じゃなかったらしい。

鈴木先生は、私の頭がぐちゃぐちゃになっているのを察して、「詳しい話はまた明日にしましょう」と言って病室から出ていく。

「…ごめんね、優紀。お母さんが、ちゃんとあなたを産んであげられなかったから…」

「それは違うよ、お母さん。私は、うまく言えないけど…『ああ、自分の人生はこうなんだ』って思ってる。悲観して諦めてるんじゃない、これ私の人生だって思えるっていうか…」

そうなのだ。確かにすごく驚いているし、不安でもある。多分私は今年の春の大学入学を諦めないといけないだろうし、もしかしたらお金の問題で大学自体に行けないかもしれない。

もっともつと先のことを考えると…………

あんまり問題ないかもしれない。

ふと、そんな考えが浮かんだ。きっと両親に言ったら怒られると思うけど、現実的かつ客観的に考えると、私の目指す将来に『子供がいる幸せな家庭』はあったけど、そこに『妊娠・出産』は無かった。いや、むしろ矛盾しているけれど自分が『お母さん』になることさえ考えていなかった気がする。

考えれば考えるほど、今の自分の置かれている状況はそう深刻ではない、と思えてきた。

「お母さん、お父さん。私は大丈夫だから、あんまり心配しないで。もう遅いし、私も疲れちゃったから、いろいろ難しい話は明日しよう？」

私以上に憔悴している両親に、これ以上心労をかけたくなくて、私は二人に家に帰ってもらった。母は「病室に泊まっていく」と言っ
てきかなかったのだが、父が「お前が無理をしてどうするんだ」と
連れて帰ってくれた。

静かになった病室で私は怒涛の一日を思い出す。いつものように家
を出て、いつものように授業を受けたり、美野里達と他愛もない話
をして…

そして、人生初めての救急車を経験し、自分が両性具有で子供を産
めない身体だと告げられ、男として生きていけると告げられた。

普通だったら取りみだしそうな状況なのに、自分でも驚くほど私は
冷静に全てを受け入れられていた。それはきっと、私は恋をしたこ
とがないから。誰かを好きになって、その人に女の子として大切に
されたい、愛したい。そういう気持ちを持ったことがないのだ。も
ちろん、それなりに恋愛に憧れはあるし、ドラマを見ればドキドキ
もする。でも、それらは所詮想像の中でのことで、現実の生活の中
で感じることは無かった。

無理に探して言うなら、美野里と出かけている時はそう言う気持ち

に近かったかもしれない。私が男の子だったら、転びそうになった時にかっこよく支えてあげられるのに、とか、遅くなったら送ってあげられるのに、とか。これがデートだったらもっといういろいろ美野里をよろこばせられるかな、とかね。

(…私、男の子になりたかった?)

いや、そんなことはない。もちろん、女である自分に不自由を感じたり、男の子の生活に興味を持ったりもしたけれど、それは誰でも一度は異性に対して思う感情であって、強い欲望として感じたことは無かった。それに、好きまでは思わなかったけれど、中学校の時は憧れている男の先輩だっていた。

こうして自分のアイデンティティやルーツを考えるうちに、夜は更けていった。

そして、明け方になって眠りについた私の頭には、一つの答えがしっかりと出ていたのだ。

覚悟と説得

「え…えっ？……ええええー！！」

「しー！！美野里、東一、静かにっ」

私と同じ驚き方をした二人に、私は焦って注意した。学校が終わって、すぐにお見舞に来てくれたので時間は早いですが、ここは病院。騒ぐのは厳禁だ。

「ごめん。でも…え？どういうこと？」

「なんでそうなるんだよ！！優紀、昨日の今日だぞ、もっとよく考えて…」

「考えたわ。考えて、考えて、先生に相談して、両親を説得して、それでも私の考えは変わらなかったの」

私が一晩よく考えて出した答え、それは『男として生きていく』ことだった。絶対に反対するだろう両親を説得するために、まずは朝の回診に来た鈴木先生に相談することにした。

先生は私の言葉に頷いて、午前中いっぱいを使ってこれから女の子として生きていく場合と、男の子として生きていく場合の治療方法や、一般的な両性具有の知識をみっちり教えてくれた。もとの性別のまま生きていくが大多数で、性別を変えた人もすごく苦労して

いるらしい。その上で「それでも、男性として生きていきますか？」と尋ねられた。

女性から男性になるのは、身体以上に精神的・社会的な面で苦勞するらしい。それでも私の答えは変わらなかった。

その後、両親に病室に入ってきてもらい、私は意気込んで「男として生きていきたい」と正直に告げた。反対されることは当然だったから、ちゃんと説得する準備もできていた。けれど…

「そうか。優紀がそうしていなら、私たちは反対しないよ。お父さんにできることがあればなんでも聞いてくれ」

「昨日あれからお父さんと相談してね、優紀がどんな答えを出しても、絶対に応援しようって決めたのよ」

両親はそう、なにも言わずに私の答えを受け入れてくれた。そうして午後は今後の事を話し合って、今に至る。

まさか、初反対が東一だとは思わなかった。

「どうしたんだよ。その…別に子供が産めなくたって、優紀は優紀だろ…」

「そうね、でも別にその事で男になることを決めたんじゃないの。二人にだから率直に言うけど、私は自分の利益だけのために男になるの。すごくエゴイステイックな理由で」

「自分の利益…？エゴイステイック…？」

私がこの決断をした理由。それは自分の子供が欲しいからではなかった。ただ男として生きることが今後の自分にとって女性として生きていくことより『利益』が多かったから。私の人生を考えた時、私は女性としてでも、男性としてでも、誰かを愛せることは間違いなかった。もちろんそう言った経験のなさによる間違った判断かもしれないけれど、今の私には両方のビジョンが明確に想像できたのだ。

でも、それも建前で、本当の理由は誰にもまだ言えなかった。

「あのね、正直これからの私の人生設計は男女どちら変わらないの。大学に行って、就職して、夢をかなえる。この過程に性別は関係ないもの。つまり、仕事において性別はイーヴン。じゃあ、私生活は？これは客観的に考えて自分の子供が持てるんだから男性の方にメリットがある。…あとは金銭的、私の精神的には負担があるけれど、それは『男性としての第二の人生』という好奇心の前では負けてしまった。それだけなの」

そう、これはただのエゴだ。自分が男女どちらでもいい、という反社会的な意識から生まれる身勝手な考えなんだ。

「…そっか。難しいけど、優紀がしっかり考えて決めて事はわかった。それなら、私は応援するから…！」

「まじかよ…俺、も…その。あのさ…」

「…東一？」

美野里が受け入れてくれたことに私はホッとした。実は彼女がもし理解してくれなかったら、私はこのまま女性でいようと思っていたから。いろんな批判は覚悟しているけれど、親友である彼女からそう言われたら、美野里を失ったら、私は何のために男性になる必要があるだろうか。

しかし、東一は違った。男女の違いなのかもしれない。なにかを言いたそうな彼からは、私の発言に対する嫌悪感や、批判的な様子は見られないけれど、やはり戸惑いから来るのだろう頑な態度である。

「あつ、私バイト先に電話しなきゃなんだ！！ちょっと、出てくるね」

「え！！う、うん…」

東一の態度で気まずい雰囲気病室から美野里は出て行き、私と東一の二人きりとなってしまった。無理やりに認めてもらおうとは思わないけど、できれば東一にも受け入れてほしい。これから、いい男友達…いや、今後は普通に友達というのが正しいのだ。そういう関係でいたい。

でも、そのために何て言えばいいのかわからない。

彼と、彼女と、

「とうい…」

「あのさ」

重い空気をどうかしよう、と、とりあえず口を開いたが、東一はそれを遮った。

「やっぱり、俺は優紀に女でいてほしい」

「…ごめん」

「謝ることじゃねーよ。ただ、俺はさ…」

どうやら私の考えが気に入らないわけではない東一の言葉に、うつむいていた顔を上げると彼の表情は見たこともない真剣なものだった。

「優紀…俺は、お前が好きなんだ。もちろん女として、優紀が好きなんだよっ!!」

かちり、と東一と目が会うと、東一は押し殺してきた感情の爆発をそのまま私にぶつけてきた。その態度はいつも飄々としている彼か

らは想像もつかない勢いでびっくりだ。

「…え？東一は美野里が好きなんじゃ…」

「違うっ！あいつはただの幼馴染だ。なあ、この状況でこんなこと言うくらい、マジに優紀が好きだ。だから、このまま女として俺の隣に居てくれよ…っ！」

思いがけない東一のセリフ。そして、溢れた思いをどうにもできなかったのだろう。東一がベットの上で上半身を起こす私をギュッと抱きしめた。

がっしりとした、力強い腕。広く厚い胸。

ぞくり、と肌が粟だった。

「っ！いや、はなして、東一！！」

どん、と東一の身体を突き放し、自分の身体を守るように抱きしめた。

「…それが、答えか？」

「今、わかった。私は、東一の望みには絶対に答えられない」

無然とした態度で私を見つめる東一の目を、今度こそ私はしっかりと見つめ返した。心臓がどくり、と大きく鼓動を打った。

「私…いや、俺は女ではいられないみたい。東一に抱きしめられて感じたのは、ドキドキでも、恐怖でも、嫌悪でもなかった。侮られたような怒りと、敵愾心だった…だから、私の東一への気持ちは友情以外にはなりえない」

「……優紀」

「ごめんね、東一。東一のことはもちろん嫌いじゃないし、むしろ好きだけど…それ以前の問題だったみたい」

抱きしめられて、なのか…自分の決意からなのかはわからないけれど。私の心は「女の子」であることを拒絶した。

東一を深く傷付けて。

「…もう、さよならかな…私たち。私はこれからも東一と男同士の友達でいたいけど、無理…だよね？」

まさか東一が私を好きだなんて思わなかったから、本当は男になるにあたって頼りにしようと思っていただけ…

男になって二人でナンパとかしちゃったり、なんて想像してたけど…

東一にしてみれば、好きな子にフラれて、しかも男になってしまったのだ。

そんな私の側にはもういてくれないだろう。

関係を拒んだのは自分なのに、東一を失うという事実には胸が苦しくなつて私はうつむいた。

「お前つて意外に冷たいのな、優紀。百年の恋も冷めるくらい、見損なつたぜ」

唐突に変わった冷たい東一の態度に、視界が歪む。

だめだ、泣いちゃ…

傷ついたのは東一で、私は彼を傷つけたんだから。

ぎゅっと唇を噛み締めて、私は溢れそうになる涙を押し殺した。

「あーあ…なんで俺、こんな酷い女に惚れてたんだ？ 気の迷いだな。…ってことだから、これからはまた別の形でよろしく」

「え…？」

うつむいた私の目の前に大きな手のひらが差し出されたて、私は顔

を上げた。

東一の顔を怖々とうかがうと、彼は優しく微笑んでいた。

「フラれたからって、優紀のことを遠ざけたりなんてしないよ。男になるなら相談相手も必要だろ？…ちょっと複雑だけどな」

「東一…っ、ありがとうっ！！」

躊躇いはあつたけど、私は無理と明るく東一の手を握って、微笑んだ。

「ちょっと待って！！どうして1年間会わないなんていうの？東一はいいのになんで私はだめなの！？」

東一との話が終わると、タイミングよく美野里が病室に入ってきた。きつと、彼女は東一の気持ちを知っていて、気を利かせたのだろう。

そこで、私はこれからどうするのかを具体的に話すことにした。

先生の話では、身体的に男性になるのには1年以上の年月がかかるらしい。今から施術を行えば、1年浪人すればちょうどいいくらいだ。

というわけで、私はなるべく早く手術を受けることにした。そして、来年の4月からは大学に行こうと。

そして、その1年間は美野里に会いたくないと告げたのだ。

「途中経過って情けないしさ、1年後に会った方がサプライズでしょ？別に会わないだけでメールとか電話とかはするから。東一はなんていうか、先生？…ね、お願い、美野里」

「……………」

「卒業式には出るから」

私の言葉に嘘は無かった。どんな風なるかはよく分からないけど、途中経過を見られるのはなんだか恥ずかしかったし、ちゃんと『男』として美野里の前に現れたかった。

「…わかった。でもっ、会わなくても友達なんだからね？」

「美野里…ありがとう」

私と美野里はぎゅっと抱き合った。

こうして、私は今まで歩いてきた道から別の道に踏み出したのだ。

長い時間

「あー…やばい。マジでやばいって…」

「うつせーな、さつきからそればかり…覚悟決まってるんだろ？」

「当然。でもさ、やばいって、ほんと」

さつきから意味のわからない言葉を繰り返す俺に、呆れた東一が苦笑いをする。俺はそんな東一の態度を気にする余裕もなく、腕の時計に目を落とす。さつき見てから5分も進んでいない。

ちなみに待ち合わせの時間まではあと10分ちよつとだ。

「はいはい、ってか…一言目はなんて言うかな？」

「…気付くか？」

「俺の隣に居るんだから気付くだろ。なに、最近電話とかしてなかったのか？」

「声変わってからはしてない」

そう、今日は卒業式から一年ぶりに美野里に会つのだ。その3分の2以上を病院で過ごした俺にとって、ずいぶん濃い1年になったけれど、大学生の1年もきつと変化に富んだ1年だっただろう。

実際、東一もこの1年でずいぶん変わった。まだ少しだけ背は伸びているし、髪もこげ茶に染めて、今着ている私服も、ずいぶんとおしゃれになった。

「へえ、楽しみだな」

「あー…心臓やばい…」

緊張して髪に手をやりそうになって、慌ててひっこめた。ぐしゃぐしゃの髪で会うなんて論外だ。

「あのー…ちょっとお茶しませんか？さっきからいいなー、って思ってた」

何回目かの時間を確認しようとした時だった。同じ年くらいの二人組の女の子が声をかけてきた。これで3組目だ。

「ごめんね。俺達人を待ってるんだ」

東一のこのセリフも3回目だ。ちらり、と東一に視線を向けると女の子の一人と目が合った。セミロングの髪がふにゃつとしていて、1年前の美野里に少し似ていた。

そのまま目を逸らすのも失礼だと思って、にこりと笑いかけると、

ぶいっとな顔をそらされてしまった。まあ、いいや。

隣ではまだ東一が女の子と話しているが、今度こそ時計に視線を落とす。約束の時間の5分前だ。

「…ゆ、まさたか優貴？」

その時だった。後ろから、彼女の声が戸惑いながら俺を呼んだ。どくり。

動揺を隠して振り返ると、彼女がいる。

「優紀って呼んでよ。美野里」

1年ぶりで、ずいぶんと大人びた美野里が、そこにはいた。

結びなおして

「本物…優貴^{まさたか}って改名したんだよね？」

「本物だよ。名前は変えたけど、美野里には前のまま呼んで欲しいな」

戸籍上の性別を変えた際に、俺は名前も優紀^{ゆうき}から優貴^{まさたか}に変えていた。これは事情をよく知らない人に何か言われるを避けるためと、新たな人間関係を作りやすくするためである。

「…本当に、優紀…男の子になっちゃったんだね」

「うん…なんか、はずいね？美野里すごく綺麗になってるし」

1年ぶりの再会は思っていた以上にお互い衝撃的だった。

美野里の髪は相変わらずだったけど、うすくされた化粧のせいかわいぶん雰囲気は変わっていて。

そのせいかなんだか変に意識してしまい会話がぎくしゃくする。

「…髪、そのままなんだね」

記憶の中より長いウェーブのかかったその栗色の髪に手を伸ばして、指に絡めた。

「っ…！！優紀、だって…」

「うん……美野里、どうかした？」

「そ、その…手、優紀なのに驚いちゃって…」

身体を強張らせる美野里の髪から名残惜しいけど、手を離れた。

そうか、もう女同士じゃないんだから気軽に抱きあったりしたらいけないのだ。

「ごめん、つい…」

「あの、別に嫌な訳じゃないからっ…」

「はいはい。二人で甘酸っぱい雰囲気だしてんなよ。俺もいるんだぞ」

なかなかスムーズにいかない俺たち二人に、東一が割って入ってきた。

美野里を前にすっかり忘れていた。

「ま、とりあえず…寒いしどっか入ろうぜ」

「うーん…なんだか変な感じ。優紀なんだけど、優紀じゃないみたい」

「それはそうだろ。でも顔はいじってないからわかっただろ？」

手頃な喫茶店に入って座ると、美野里も落ち着いたのか徐々に前みたいな態度になった。

今はじーっと俺を観察している。

「髪が短いからかな？背も伸びたし」

「いやいや…そんなレベルじゃねーだろ」

「そうだよ！！むしろ顔のパーツと髪の色以外は全部変わっちゃって…東一と並ぶと威圧感有りすぎ！！」

きつと美野里は身長のことを言っているのだろう。

高背の父親に似てもともと高かった身長は15cmほど伸びて、今は180cmはある。

「本当は待ち合わせの15分前には二人を見つけてただけど…優紀じゃないと思ってたの」

「んー、自分じゃあんまり変わった感じないんだけど」

東一が言ったように、中身は手を入れたけど外見は特になにもしていないのだから。

「仕草とか変えたからじゃん？」

「そうかも。歩き方も、ちょっとした所作も全然女の子っぽくないのね？」

「俺のおかげだな。一緒に住んでよかったろ？」

美野里の言葉に東一が満足そうに俺に笑いかけた…と同時に隣のテーブルに座っていた女の子たちが「いやああ、本物見つけちゃった！！」と囁くのが聞こえてきた。

「……………えっと、愛は性別を越え」

「ないから」

「俺らの場合は」

もちろん美野里も本気じゃないだろうけど、ここははっきりさせねばならない。

「美野里は気づいてなかったけど、しばらく東一の家で男らしい生活を泊まりこみで勉強させてもらってたんだよ」

「嘘っ！！全然気がつかなかった…」

手術と同時に俺は東一からいろいろな事を勉強していた。

特に苦労したのが仕草だ。

ちよつとでも女の子らしい仕草があると、あつちの人みたいなのが嫌で徹底的に直したのだ。

「本当に目の前にいるのがもと女の子なんて信じられないよ。優紀、綺麗な顔してるし、細身で背が高いからモデルみたいね」

「あれ、美野里に言ってないのかよ。優紀、実際モデルしてるぞ」

「東一、勝手にいろいろ美野里に言ったって！！」

放っておいたら聞かせたくないことまで言いそうな東一を、俺が睨んで黙らせた。モデルの事はあまり知られたくなかったのに。

「えー！！モデルしてる優紀見たい！！いまこのままでもかっこいいんだもん、雑誌とかのかっこつけてる優紀はいい男って感じてしょー！！」

「いや…俺、別にかっこよくはないから。探したりするなよ？」

とりあえず笑って誤魔化そうと、にっこりと美野里に笑いかけると彼女はぴたりと口を閉ざしてうつむいたのだった。

来春の予定

「うー…私、ちゃんと大学で優紀のこと守ってあげられるか不安になってきた…」

「まあ、慣れる。こいつマジで天然だから」

俯いたままぼそつと零した美野里のセリフに、東一が答えるけれど、一体何のことだろうか。美野里に守られるような状況ってわけでもないし、俺は天然じゃない。

わからない事はとりあえず置いておき、二人に言わなければならぬ事があつたのを思い出した。

「あのさ、大学なんだけど…俺、奥宮大経営学部おくみやに受かったから」

「え…えっ？……ええええー！！」

「大声出すなって！！」

驚くのは無理もないのだけど。さっきの美野里の発言からして、きっと去年目指していた大学をそのまま受けると思っていたんだろうから。

去年の俺は美野里と同じ私立大学を狙っていた。ちなみに美野里は

そこに受かり、東一はすぐその近くの別の私立大学に通っている。

しかし、俺には予想外に1年という時間ができた事に加え、手術だなんだと親に負担をかけてしまった。父親は一応エリートというやつで、お金の心配はしなくていいといわれたけれど、俺はせめて学費の安い国立大に行こうと決めたのだ。まあ、他にもいろいろ理由はあるけれど。

そしてせっかくなら1ランク上の大学を目指そうと、結構真面目に勉強した結果がこれだ。

「お前、いつの間に勉強したんだよ！！この1年それどころじゃなかったろ！？」

「東一のいない時にしてたんだよ。どうせ術後はベッドの上ですることなかったし」

「…優紀、この1年一体何してたの？ちよつとずつ聞いてると訳わかんないよ」

東一の言うとおり、性転換のための治療は今も続いており、生半可なものではなかった。細胞一つ一つが無理やり作り替えられるような苦しさもあったし、精神的にも慣れないことばかりだった。

それでも時間的にも、金銭的にも恵まれていたと思う。

「何って…治療と勉強とバイトと、あと車とバイクの免許取ったく

らいで大したことしてないよ」

「まあ、いろいろ活動できたのは最近だよな。やっぱり大きな手術の後はずいぶん苦しんでたし。泣いたりしてたよな」

「はい、覚えてないからー。東一のうそじゃない？」

辛かった話なんてしたくない。もう、終わった話だから。

「まあ、そう言うわけだから。俺はバイクで通うからあんまり会えないからさ、美野里、遊ぶ時は声かけてよ。って、二人じゃ彼氏に怒られるか」

「か、彼氏なんていないから大丈夫！！一緒に大学に行けるの楽しみにしてたんだから、その分たくさん遊んでもらうからねっ」

「そっか、良かった。っと、ごめん。ちょっと着信だから…」

ちよつとわざとらしいかな、と思っただけけど、作戦は上々だった。美野里に恋人がいたらなかなか会えないだろうから、気になっていたのだ。

だからと言って、男になった今「彼氏いるの？」なんて、聞くのもなんだか嫌だったのだ。しかも、俺と一緒に良かった、みたいな事まで言ってくれた。

浮かれた気持ちを隠して、バイト先からの電話に出るために俺は席

を立つのだった。

美野里の本音

「…東一。私、変じゃなかった?」

「別に普通に見えたけど。さっきまでは」

優紀の背中が見えなくなると、私はテーブルに突っ伏した。あれは卑怯だ、不意打ち過ぎる。もんもんとする感情を抑えきれずに私はバタバタと地団駄を踏んでみた。

「何? 優紀に惚れたか? 女は現金だなー」

「ちょっと!! 変なこと言わないで!! 優希は私の大切な友達なんだから。でも、あんないい男になるなんて、卑怯でしょ……きゅんきゅんするーっ!!」

卒業式以来、約1年ぶりに優紀に会えると、今日の私は張り切って家を出た。春の陽気に誘われて選んだ白のニットワンピースにピンクを基調とした大判ストール。足元もブーツは卒業してちょっと高めのヒールのパンプス。もちろん時間は待ち切れずに30分も余裕を持った。

男の子になった優紀なんて想像できないからドキドキしながら電車の中で想像した。きつと、最近デビューしたジャニーズの子たちみたいに可愛いだろうな。

東一も一緒に居るはずだから、あの無用な身長のおかげですぐに見つかるはずだ。そう思って、待ち合わせに指定された大学の最寄り駅の改札を出ると、前を歩いていた女子高生らしき二人組が何を見つけたのか、小さく歓声を上げた。

「ちょっと、見てみて！！あそこに立ってる二人、超かつこよくない？」

「え？うわあ、ほんとだ！！やばい、マジでかつこいい！！二人とも背高いし、おしゃれー！！」

きやつきやと盛り上がる二人に意識が向いていたが、よくよく見れば他にも多くの女性が駅の出口付近にいるらしい男性二人組の話で盛り上がっているようだ。

…ちょっと見てみたいな。

自慢じゃないけど、大学に入っただのに今まで浮いた話がない私。かつこいい男には興味くらいあってもいいはずだ。ちょっとだけ胸を踊らせて東一を探すふりをして噂のもとへと目を向けた。

そこには確かに二人の背の高い男の子がいた…が、片方の壁にもたれて立っている方は東一だ。残念すぎる。

もとはと言えば、帰りが遅くなる飲み会とかに私のお母さんに頼まれたからって、東一が迎えに来たせいで私は勝手に彼氏持ちに分類されてしまったのだ。だから合コンにも誘われない。

そんな東一は放っておいて、私はその隣で姿勢よく立っている方に目を向けた。身長は東一と同じくらいで、カーキのアシメジャケットに細身のパンツというスタイルは春らしい。徐々に細部を見ていくと、髪は私と同じ栗色。そして顔は…

……？

どこかで見たことがあるような気がして私は目を凝らすのに、彼は私の視線に気付くことなく髪に手を伸ばして顔を隠してしまった。

その上、二人組の女の子が東一に声をかけたせいで彼の姿は見えなくなる。その子たちも見たことある…と思ったら、それは私の同級生だ。私の彼氏（と思われる）男に声をかけるとはなかなか大胆だなあ…

そんなことを考えながら、彼女達に気がつかれたら気まずいので、私は東一に背中を向けてきつとこれから来るのだろう優紀を………！？

そこで私は思い出した。最初の女子高生は「二人組」と言っていたではないか。そして見たことのある顔だと思ったけれど、あれは。

慌てて振り向く。そこに合ったのはニコニコと馬鹿みたいに女の子と話をする東一と、その隣で女の子には目もくれず腕時計に目を落としている彼　優紀だった。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連「横書き」という考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n2807r/>

僕と彼女の同性生活

2011年3月19日14時41分発行